場所　〒502-0812　岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」

わいわい、がやがや、みんなで哲学

第160号
2021年11月

哲学カフェ de ぎふ
千秋（せんしゅう）まちかど文庫　通信

運営委員会発行(記録：安藤彰浩、編集：中川健史)(主宰：吉田千秋 090-7917-9602　yoshida0@sepia.ocn.ne.jp

第160回例会　2021.10.14

《テレビ番組とどう向き合うのか？》

「意見交流を通じて、各人それぞれいろいろな番組を見ていることが分かった。インターネットによる情報なども多様化してきたが、それでもテレビの影響力は大変大きい。それゆえ危険性も高いので、ぜひその点も自覚して向き合うことが大切だと感じた。」

問題提起　吉田千秋（主宰）

・これまでも何度か報道機関としてのメディアのあり方をテーマとして取り上げて来ました。今日は報道の問題に限定しないで、テレビ放送全般のあり方をテーマとして議論したいと思います。安倍政権は“特別秘密保護法”を成立させるなど、報道機関への締め付けを強め、様々な形で表現の自由の制限を試みました。NHKは政権の人事介入によって、報道機関として弱体化、政府批判は影を潜める嘆かわしい状態となりました。多少の改善は見られるものの、NHKはいまだ政府与党の広報機関的な状況を脱しきれていません。

・インターネットの登場で状況は少し変わりましたが、他のメディアに比べメディアとしてテレビが果たす役割は非常に重要で、その世論に及ぼす影響はまだまだ大きいと言えるでしょう。メディアは国民の知る権利を守る役割を持った社会の公器と見なされるべきものです。国民が主権を行使して社会の主人公として行動するためには、判断の材料、知識が必要です。メディアは大きな資本の金の力によって政治が歪められない様に権力を監視する役割を担っています。そのためにも、権力と向き合うメディアの自立性が十分に担保され、国民の知る権利の前提となる表現の自由が保証される必要があります。

　もちろん、メディアの役割は報道に限定されません。国民に日々の生活の中で、娯楽を提供することもメディアに与えられた役割です。私たちは具体的にテレビで何を見ているのでしょうか。一人ひとりの見ている番組を通じて、人々が何をテレビに何を期待しているのかはっきりするでしょう。ビデオリサーチという視聴率を調査する会社があって、毎週その結果を発表しています。様々なアプローチがなされていて、全ての番組をひっくるめた視聴率から、ドラマ、報道、スポーツ、アニメ等々、ジャンル別の視聴率まで詳細に結果が出されています。とにかく色々な番組があって、私個人は出演者の名前を見ても知らない人ばかりで、テレビ文化から縁遠くなっていることを感じます。

・視聴率ランキングを見ると、NHKニュースがしばしば上位を占めていることが分かります。特に災害時にその傾向が目立っており、多くの日本人が地震など災害報道に関心を持つことの表れの様に思われます。NHKの朝ドラの視聴率も比較的高いようです。また“新日本風土記”、“報道ステーション”、“真相報道バン記者”、等、報道、ドキュメンタリーの類も好まれている様です。その他には、“笑点”、“サンデーモーニング”などの長寿番組、“おはよう日本”、教養番組“ダーウィンが来た”などが上位で名を連ねています。個人的には、金平茂紀氏がキャスターを務める土曜日のTBS報道番組”報道特集”を勧めます。為政者の立場からでなく、明確に国民サイドの視点で問

題を捉えようとしている点が評価できます。

•テレビの1960年代以降爆発的に増加し、人々の認識や考え方に与える影響は極めて大きなものでした。「一億総白痴化」と評されたり、子どもへの影響が心配されたりもしました。近年、ネットがテレビに取って代わろうとしている様にも見えますが、テレビという公共の電波メディアが果たす役割はまだまだ大きいと思われます。だからこそ、テレビ番組との向き合い方は重要でしょう。

•皆さんは普段どんな番組をご覧になっているでしょう。お気に入りのテレビ番組を紹介したり、番組に関する意見や感想なども出し合って考えたいと思います。

意見交流

＊NHKの“映像の世紀”は非常に優れた番組だと思う。現代の歴史について多くを学ぶ事ができる。改めて自分が生きてきた時代について知らなかったことが一杯あることを気付かされる。

＊働いている大人の多くは疲れて外から帰って、先ず家でリラックスしたい、会社で溜まったストレスを解消したいと思っている。そうした人の期待に、悲しい事件のニュースや国会での与野党のやりとりを伝える報道番組がリラックスに適したものかは疑問である。政治の事や社会の事を考えるためには、それなりの精神的余裕が必要である。それが多くのサラリーマンに欠けているではないか。

＊以前はもっとドラマが多かったのではないか。テレビはいま、いつでもチャンネルを切り替えることのできるお笑い番組や情報バラエティーなどが氾濫している。時間を割いて、中に入り込む必要のあるドラマは、効率を追求し何でも早く片付ける時代に番組として合わなくなっているのかもしれない。人の出会いや別れを描くためには時間がかかる。生活習慣を合わせないと連続ドラマの様なシリーズものを繰り返し見ることはできない。何故そうなったのか。人々がドラマの様なものを求めなくなったのか。番組を制作する側の事情でそうなったのか。

＊番組作りは全般におとなしくなった。テレビ局は夜の遅い時間帯に、時折、性的表現を規制する放送コードに抵触しそうな、挑発的な内容のものを放送することもあった。権力と報道機関の関係も、もっと大人の関係であった様に思われる。メディアは平気で政治を厳しく批判し、政治家を激怒させた。政治家もメディアはメディアの仕事をするだけと割り切っていて、本気で報道を規制しようなどと試みなかった。最近のメディアはすっかり弱腰になっている。

＊昔は、欠かさず必ず見るテレビドラマが週に幾つかあった様に思う。最近そういうものが無くなった。

＊タレントが秘境を尋ねる冒険、探検企画が面白い。そういう企画は専門家チームによる学術調査を目的としたものよりも、共感しやすい強みがある。

＊きまって見る番組は無いが、興味を抱いたものは録画して後から見たりしている。アニメをよく録画している。

＊好んで見ている番組は、有名な占い師が街行く人に声を掛け占っていく“突然ですが占っても好いですか”、色々工夫して成功に至った人々を紹介する“逆転人生”、マツコ•デラックスが様々な分野で人生を捧げた専門家とトークする“マツコの知らない世界”など。自分とはまったく違った人生を送っている人の実人生に興味がある。

＊“プロフェッショナル仕事の流儀”がお気に入りである。レギュラーのパースナリティーが毎回特殊な専門分野の招いて、その人の仕事場の様子を記録映像で

紹介して、スタジオで当人にインタビューする番組。空港で到着した外国人にいきなり来日目的を尋ねる“youは何しに日本に”という番組も面白い。ビジネスの分野で再出発を期する企業の社長を紹介する番組“ガイアの夜明け”も見ている。

＊昔は二折になった新聞を手にして先ず開いて、番組が載った一番裏を見た。その日のテレビで何を見るか予定を立てることが日課になっていた。全体にテレビを見ることが少なくなった。

＊50年代の終わりになっても、テレビのない家庭は珍しく無かった。テレビのある家に近所から人が集まったりもした。当初、テレビを有害だと考え、テレビを持つことそのものに抵抗感を持つ人も少なく無かった。状況は間もなくすっかり変わって、テレビを備えている事は当たり前となった。

＊いつもNHKの7時のニュースと連続ドラマを見ている。テレビ報道が人々に与える影響は非常に大きい。多くの人がテレビのニュースが映し出す世界を現実そのものと理解する。通常、そこに嘘があるとは思わない。しかし、民族対立を利用して権力を握ろうとする者たちが、自分たちの政治的思惑でテレビ報道を歪めようする危険を認識する必要がある。ボスニア紛争の報道でもそういう問題性を感じた。

＊（年配の人）　私のテレビ初体験は少し遅かった。120世帯ほどの小さな村で、新しい文化が浸透するのに時間がかかった。ラジオを通じて外の世界の情報に接していた。初めてテレビを見たのは16歳の時だった。テレビで目にした女性が田植えをする光景が記憶に残っている。「一億総白痴化」と評した大宅壮一氏がキャスターを務めたニュース番組が印象深かった。

＊最近見た番組は“世界不思議発見”“笑点”“真相報道バンキシャ”また池上彰氏のもの、“日本百名山”“徹子の部屋”など。ドラマで言えば、ビジネスの世界を描いた“ハゲタカ”が面白かった。

＊NHKの大河ドラマを見る。今は“青天を衝け”をやっている。出川哲郎がホストになっている番組も見ている。

＊ニュースを見るほか、“ガイアの夜明け”、作家の村上龍がホストで政財界のゲストにインタビューする番組“カンブリア宮殿”、テレビ東京の看板番組“ワールドビジネス”も見ている。これから成長しそうな産業を紹介する様なものに興味がある。

＊日曜日にやっている幾つかの報道番組を見ている。

＊小学校3年、多分1954年頃、テレビを初めて見た。珍しいので、近所の人たちがテレビを見に遣って来た。テレビ番組に為になるとか、好ましい印象を持たなかった。自分が親になって、子どもがテレビを見ているといつも見るなと注意した。

＊テレビがある生活の始まったのは、小学校の3年位の頃だった。かなりテレビを見たように記憶している。そのために本を読まなくなった。今になって、もしテレビを見ないで、その分本を読んでいたら、どれほど良かったかと思う。

＊関口宏が保阪正康と共に、日本の近現代史を振り返る土曜日お昼の番組が興味深い。かなり批判的視点で知らなかった事を教えてくれる。

＊テレビは歴史的な出来事の画面を通じて、共に体験することを可能にしてくれる。テレビで生中継された1969年のアポロ11号月面着陸の模様が忘れられない。しかし、悪い意味でテレビに慣れ、テレビ無しでいられなくなり、無目的にテレビを付けっ放しにする人たちもいる。

＊笑福亭鶴瓶の“鶴瓶の家族に乾杯”を見ている。放映されれば寅さん映画も見逃せない。テレビ朝日のモーニングショーもよく見る。

＊最近余りテレビは見ない。時間があればYou-Tubeで投稿された動画を見ている。

＊“デモクラTV”と呼ばれるインタネットテレビの番組があった。リベラルなプラットフォームを目指して、時事問題の解説やインビューをやっていた。

意見交流の最後に　吉田千秋

•今日はいろいろな人がいろいろな番組を見ていることが分かりました。もちろんこれでなければならない、「正しい」見方がある訳でありません。それぞれの見方があって当然です。皆がそれぞれの人生を生きて来て、相応の経験をした背景があるのですから。

•それにしても、私たちはどのように番組を選択しているのでしょうか。今日の意見交流の中でも発言がありましたが、ただ見たいから見るのか、やっているから見て好きになるのか。つまり、見る側の興味、関心に合わせて番組は作られるのか。作る側が見せたい思う番組に見る側が合わせる様になるのか。それは容易に答えられない問題です。

•大切なことは、テレビとどう向き合うかということです。テレビは現在起こっている事を現場から、映像という形で他のどのメディアよりもはっきりと直接的に伝えることができます。テレビはいつも外の世界への窓口の役割を果たしています。使い方次第で、私たちの人生に必要な知識を得ることもできます。SNSやYou-Tubeが新たに登場し、個人が主体的に情報を入手したり、自ら進んで情報発信することが可能になりました。インターネットを介した新しい情報メディアが私たちの生活に大きな影響を与えるようになっています。

•しかしソーシャルメディアの役割はあくまでも補完的なもので、現実の世界を直接再現することのできるテレビが果たす大きな役割を越える様なものではありません。テレビは情報伝達だけなく、生き方の参考になる知識も提供し、様々な娯楽を提供することもできます。私たちの自由な時間は限られていて、いつも映画を見るために映画館に行ったり、音楽を聞きにコンサートホールに出かけたりする余裕があるわけではありません。その点テレビは私たちの日常を楽しみの時間に変える手近な手段でもあります。ボクは主として本の世界の人間で、多くの時間をテレビの前で過ごすことはありません。それでも機会を見つけて、自然•生き物の世界や民族•歴史を紹介したドキュメンタリー、報道番組を見ます。

•要はうまくテレビを活用することでしょう。それにしてもテレビは大きな影響力を持っています。テレビ番組を作っている人たちが自分たちの役割の自覚を失い、政治権力と結びつくと怖いことになります。事実を歪めたり隠蔽したりすることを許さないようにしなければなりません。私たち自身が情報を読み解く力を身につけることが必要だと思われます。

例会休止。便り、意見など

○＜久しぶりに例会に参加して＞

数か月ぶり、やっぱり顔と顔を合わせて話をするのは楽しいですね。今回のテーマ「テレビ番組とどう向き合うか」について、自分はどうだろうかと考えました。私は、人生、生き様、人生観が現れる番組がすきだなあと感じました。なぜ？

産業カウンセラー、キャリアコンサルタントとして、様々な人の人と出会い相談をします。一人一人に寄り添いたい、わかり合いたい気持ちから、人を焦点にしたテレビを見て、様々な人生があることをうけいれているのかなあと思いました。

私は世の中を変えたいという働きかけよりも、今現在の環境（社会、家族、地域等）の中で、自分はどう生きるのかということに着目していることに気が付きました。

そうか、どう生きるかか！　にこだわっているから、産業カウンセラーやキャリアコンサルタントの資格をとったんですね。　（子猫）

○＜テレビ番組の基本問題は？＞

テレビ番組についての基本的な問題が、例会ではあまり議論にならなかったので書きます。テレビ番組はあくまで見世物であり、重要な意味や価値はないと思い

ます。テレビ局の正社員の平均年収は1500万円程と言われています。この高収入の源泉は、大企業スポンサーからの広告収入と諸外国と比べると安い電波使用料［一社あたり数十億円、電波オークション制にすれば数千億円かかる］にあると思います。
電波使用の認可の権限は国［総務省］が握っています。テレビ局の社員は自分たちの高収入を維持するためには、支配者層のためのシステムに逆らうような報道とか真実を伝える番組など作れるはずもなく、せいぜいガス抜き程度のものしか製作できないと思います。このようなものに影響されるのも嫌なので最近はテレビ番組に興味がなくなりあまり見なくなってきました。たまに見るのは「世界ネコ歩き」ぐらいです。（たなか）

○＜テレビを見ない子どもは‥＞
日頃テレビを見ないし期待もしない私ですが、今小学1年の孫もテレビを見ないで育ってきました。息子の嫁によれば、ヨチヨチ歩きの頃、時々ユーチューブの番組を見せていたら、目が映像にだけに行って手を動かさなくなっていることに気付き、テレビのない生活を続けてきたと言います。
学校へ上がるようになると、それでは子ども同士の共通の話題に事欠くのではないかと、私は少し心配でしたが、今になってそれも杞憂だと判りました。子どもの家庭での過ごし方は多様で、学級においても他の子の話題に付きあうことに、そんなに神経を使う必要はないそうです。むしろ、今まで折り紙・紙切り・工作・絵を描く・本読みなどに親しんできたことが、学校生活での自信に繋がっているみたいだ、とも話します。
ボランティアで行ったフィリピンの養護施設の子どもたちもテレビなしでした。日頃から手足を使って遊び・仲間になるスキルが実に豊富で、逞しかったです。情報は、入力と出力のバランス（？）が大切。身体や心の欲求に見合うように与えられないと、おかしくなるのではないか。たぶん大人も？
（フィリピン・ウオッチャー）

○＜投票率の低下＞
各種選挙の投票率が下がってきているが、衆議院選挙の場合、戦後7年目の25回選挙（1952年＝昭和27年）～31回（1967年＝昭和42年）の間は71%～76%だったが、このところ46回（2012年）～48回（2017年）では52%～59%と落ちたまま推移している。
「投票率がどこまで下がったらダメだ」と数値としては言えないが、下がり続けると民主主義の基礎が壊れてしまうことになる。投票率が下がっているそれぞれの人の諸事情や　制度面での問題をつかみ、投票率の向上について考えていきたい。
（アダム・スミス）

○＜騙されない力をつけましょう＞
連日の振り込め詐欺事件の報道を見るにつけ、日本は「詐欺王国」だと言わざるを得ない。さらに、「騙すのは悪いが、騙されるほうも悪い。」と。
安倍・菅政権時代の数々の「憲法無視」の法案の強行採決はもちろん、「森友」「加計」「桜の園」「学術会議任命拒否」問題は未解決で、大問題であるにもかかわらず、日本の自民党政権が、存続しているのが不思議で仕方がない。同じ穴のムジナ集団、自民党から何やら怪しい経緯で総裁に納まった岸田首相が前政権を継承するという。民意を無視した前政権の踏襲を認めてよいのであろうか。否である。耳障りの良い「経済成長・詐欺」に騙されてはいけない。
平和憲法を守り安全・安心・安定した社会を目指すことこそ、喫緊の課題である。今度の衆議院選では、反自民で結集する国民の「騙されない投票」を切望する。
（MS）

＜京都だより　その6＞　「京都で思う野党共闘」

この度の選挙でも「野党共闘で政権交代を」と盛んに唱えられました。
京都は共産党が強く、市政では野党第一党です。かつての立憲民主党との共闘は必ずしも上手くはいっていません。また、自民・立民推薦対共産推薦という構図も強くあります。幹部が、選挙時、共産党との共闘に反して以前の同志を「かつての仲間だから」と応援したこともあります。
今の立憲民主党は、前身の同名の党の出発が民進党存立の危機に際して希望の党に合流しようとして拒否され旗揚げされたもので、1週間程の間に態度を二度大きく変える変わり身の速さでした。合流を判断する両院議員総会動画で映っていた幹部・議員の笑顔、のるかそるか乾坤一擲にも拘わらず会議の和やかな雰囲気は、合流すれば地位は安泰との安心感、出来レースの緊張感のなさでしょう。その後、立民の立党に際しては、石原元都知事から「本物の男に見える」（ツイッター）との言葉もありました。国民を愚弄する姿勢に共感したので

しょう。

民主党政権時は、原発の海外輸出を進めようともしたり、「冷温停止状態」と言ったりもしました。これらの過去を謝罪することもないのは、口にする政策が思想ではなく手段であるからではないかと思います。

そもそも、今の国政選挙は「一票の格差」により「違憲」「違憲状態」と最高裁判決の3分の1で判断されていて、議員の地位の正当性が云々される状態でもあります。選挙時のキャッチフレーズは、どの政党が言っても同じようなものに思います。耳触りが良く、選挙民はその「宣伝文句」から商品を買わされるように投票しているようにも思います。

「こんなことをやります」だけではなく、「何をしたか」も判断の材料に、信頼に足り得るのかも含め考えたいです。

投票で変えるのは「政治」ではなく、とりあえず「議員の構成」でしょう。その後の私達の上げる声と監視が大切だと思います。　(hiro)

毎日新聞(2017.9.30)より

＜世界一周貧乏旅　その26＞　「世界最大の露天風呂」

カサカサカサと、複数の乾燥した葉が風で流される音が聞こえるので、地面に落ち葉が増えたことがわかりました。また急に時計の秒針の音が大きくなったなと思ったら、主張の激しい虫たちがいなくなっただけでした。息を深く吸うと乾いた空気で鼻の奥の水分が無くなるのがわかりふと、あれ、これ嗅いだことあるな、と思って考えていると、アイスランドの空気を思い出しました。

僕が訪れた10月はアイスランドの冬の始まりに当たり、ちょうどオーロラを観測できるようになる時期で、しかも真冬ほど寒くないのでオーロラツアーにはベストシーズンと聞きました。とは言っても、日本の冬くらい寒いです。なんとも温泉が恋しくなる気候です。

そこで朗報です。名前から言うまでもなく寒い寒いアイスランドですが、なんと世界最大の露天温泉があるのです。

首都レイキャヴィクからバスに乗り、苔の生えたでこぼこの溶岩をひたすら眺め40分、地熱発電所の白い煙が見えると、そこにはブルーラグーンという露天温泉施設があります。

そこはアイスランドで最も有名な観光地と言えるほどに人気な観光スポットです。何と言ってもその広大な面積が特徴で、競泳用50メートルプールが4つも入ってしまうほどの大きさがあり、温泉の入り口から目を凝らしても、反対側でお湯に入っている人は米粒くらいにしか見えません。端っこでくつろぐつもり方は、先にトイレへ行っておいた方がいいです。

そしてここは温泉施設とは言え、日本人がイメージする温泉とはかなり違っています。まず、お湯の中に物を落とすと見つからなくなってしまうほど青みがかった濃い乳白色をしており、ブルーラグーンの名の通り、見渡すと湯気の立つ真っ青な湖に見えます。これはお湯に含まれるシリカのせいでそう見えるのですが、同時にこのシリカはアトピーや湿疹など皮膚病への効果があり、露天風呂の各所にはシリカの真っ白な泥が用意されているので、これでもかと言うくらいに好きなだけシリカ泥パックをすることもできます。

また日本の温泉では考えられないのですが、ブルーラグーンの露天風呂にはなんとバーが併設されています。温泉に浸かったままお酒を買って飲むことができ、しかも湯温も39度と比較的低めなため、のぼせることなく日が暮れるまでお酒を飲んで温泉でのんびり過ごすなんていう贅沢もできてしまうのです。

さて、日本は緊急事態宣言が解除されワクチン接種も70%に到達しようとしていますが、海外旅行ができるのはまだかまだかと僕は待ち望んでおります。次の冬はアイスランドの温泉でお酒が飲めるといいのですが。

（カモノハシタニ）

この一本・映画情報　ユージン・スミス監督『MINAMATA』

戦後日本の高度経済成長期の中で、大きな犠牲を出してしまった有機水銀公害は、今は終わったことになっている。この事件を思い起こさせる映画をアメリカの映画会社が提供した。水俣で起こったことを軸に、ユージン・スミスという写真家の精神性を感じさせる作品である。

昔、写真は写される者の魂を奪うなどと言われた。彼は「写真を撮る側の魂も奪われるから、覚悟して撮らなければ」と、言っている。世界中を歩き、戦場を写し、心身共に傷を負った彼は、アイリーンの導きで水俣にたどり着き、最後の仕事場担った。

水俣では、人々の拒絶、様々な妨害にあい、断念しようとした時、水俣病の少年とのやり取りのなかで、「写真でも撮るか」と、再びカメラを手にした。

この言葉に私自身なんだかホットしたような、慰められるような気持ちになった。そう、人は痛めつけられ、辱められ、傷つきながら生きている。途方にくれた時、ユージンは「写真でも撮るか」と言った。同列にしては失礼かもしれないが、私の場合は「ご飯でもつくるか」となる。

こうやって、人は目の前の苦しさ、つらさを押し込めて生きていくのだと思った。もちろん、彼の写した「水俣」は美しい。　（北川はるか）

この一冊　半藤一利著　『戦争というもの』PHP研究所、2021年

著者半藤さんは今年1月に逝去され、孫に編集を託された本書が遺作となりました。『日本のいちばんながい日』『ノモンハンの夏』『昭和史』などで著名な半藤さんが、特に若い世代に向けて伝えるために、戦争とはどういうものであったかを分かりやすく書かれたものです。

その手法は、太平洋戦争下で知られた名言・スローガンを紹介し、自身の戦争体験を踏まえて「戦争というもの」の本質を露わに示すものです。

真珠湾奇襲攻撃の連合艦隊司令官山本五十六の有名な「一に（いつに）平和を守らんがためである」という言説、「バスに乗り遅れるな」という大流行のスローガン、「理想のために国を滅ぼしてはならない」という若槻礼次郎首相の演説など、太平洋戦争開戦直後は、戦争を昂揚する言説に国民は踊らされた。

しかし、そのうち戦争状況がかんばしくないことがわかりだすと、国民（当時は「臣民」でしかなかった）に厭戦気分が広がり、お上の方針に逆らう替え歌や言説も広まった。その代表例が、「タコの遺骨はいつ還（かえ）る」という、流行歌「湖畔の宿」の替え歌であり、「欲しがりません勝つまでは」という標語に対して、「足らぬ足らぬ（工）夫（おっと）が足らぬ」という落書や、「ぜいたくは（素）敵だ！」という民衆のつぶやきである。

さらに敗戦色濃い中で、国民のいのちより国家（＝国体）護持しか考えなかった指導者たちの、無為・無策・狂策に対する批判は鋭い。硫黄島司令官栗林忠道の「太平洋の防波堤となるのである」、沖縄方面司令官太田実の報告「沖縄県民斯く戦へり」などなど。

著者は末尾に、「戦争は、国家を豹変させる。歴史を学ぶ意味はそこにある。」という書を掲げています。危ない世になってきたいま、この言をかみしめたいものです。　（sensyu）

2021年後半 哲学カフェ、第26期の予定

例会は19:00～21:00です。

会場は、 ふれあいスペースです。コロナ警報で中止の場合あり、テーマも変更あります。

第158回例会 8月12日（木）	**休止します** お盆とコロナ感染対策のため 緊急事態宣言中につき 中止しました
第159回例会 9月9日（木）	**「東京オリンピック強行、どうだったのか？」** ＊加速するコロナ感染増と医療危機の中での強行。さまざまな問題が露呈した。 ＊オリンピックのもう開催しないなど、あらためて抜本的に見直す必要があるようだ。 中止しました
第160回例会 10月14日（木）	**「テレビ番組とどう向き合うのか？」** ＊テレビの衰退が言われているいま、本当に楽しく、有意義な番組はあるのか。 ＊報道番組、ドラマ、ドキュメンタリー、バラエティ番組等、推奨したいものは？ 終了しました
第161回例会 11月11日（木）	**「総選挙はどう仕組まれ、その結果は？」** ＊安倍政権を引き継いだ菅政権は、無策・失策続きで、総選挙は勝算が見えない。 ＊とうとう議員満了まで引き延ばし。五輪強行、ワクチン頼みの結果はどうか？
第162回例会 12月9日（木）	**「日本社会を変えたいのか、変えたくないのか？」** ＊この1年を振り返って改めて考えてみると、考えさせることがいろいろあった。 この社会の何を変えたいのか、変えなくてもよいのか、そこを探ってみたい。

哲学カフェの運営資金の協力 も、よろしくお願いします。

口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中 !!

http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/

右のQRコードをスマホなどで読み取ると、「哲学カフェdeぎふ」のホームページが開きます。ぜひ閲覧願います。友人・知人に拡散いただければ幸いです。

アラカルト わいわいがやがや

★旧東ドイツにワイマールという町があります。ここはかつてザクセン＝ワイマール公国の首都で、文豪ゲーテが宮廷顧問官に招かれ、古典主義の文化を花咲かせました。現在は世界遺産登録され、そのシンボルは、国民劇場前のゲーテとシラーの像です。

★ボクはこの町に、1976年8月20日に、留学先の西ドイツ（ハイデルベルグ大学）に行く途中に立ち寄りました。ゲーテ、シラーもさることながら、福祉国家の基礎を築いたあのワイマール憲法の生誕地と、その郊外のブッヘンワルト強制収容所を訪ねるためでした。

★それから37年後、2013年7月29日に、当時の安倍首相が改憲を進めるために、麻生太郎副総理が、憲法改正をめぐるシンポジウムで、「ナチスの手口に学んだらどうかね」と発言しました。それは現憲法に、首相の超法規的権限を付与する「非常事態宣言」条項を多数で承認させろというものでした。

★その幾日か後に、あのゲーテとシラーの像の前に立って、「このような発言を許してよいのでしょうか」と、屹然と話しているテレビ報道記者が目に入りました。TBS「報道特集」の金平茂紀さんです。ワイマールの懐かしさも加えて、そうだそうだと頷きながら食い入りように見つめました。

★そして、日本国憲法公布75周年の今日2021月11月3日、「ぎふ平和のつどい」でその金平さんが、総選挙の結果、改憲勢力が3分の2以上の議席を得たことを憂え、「この状況をしっかり見つめて力を合わせて前に進みたいものだ」と強く訴えられました。

★金平さんの話しに700名を上回る参加者が大きな拍手で応えました。ふり返って見れば、憲法破壊の危機はこれまで何度もありました。楽観はできませんが、この拍手にこみあげるものを感じ、ボクは閉会挨拶で心の底から「憲法9条は不滅です」と叫んで締めくくりました。

（吉田千秋）